

想巡

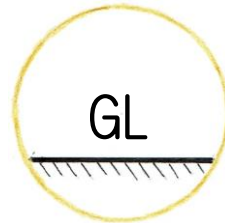
日常の中で「GROUND LEVEL」について考える人がどのくらいいるだろう。GLだけではない、いつでもそこにあることが当たり前になっているものこそが私たちを構成する一要素なのである。しかしいつものせわしない生活の中ではそのあたり前を振り返る時間がなくなってしまっている。私たちは、自分や自分の周りにあるものを振り返ることによって新たな発見を得ることができるだろう。あたり前にそこにあるものについて思考を巡らすための時間的・精神的な“余裕”をこの建築にて提案したい。

小学校外観



建築と自然に見出す関係性

環境、植物、土の要素間に密接なつながりがあるように、GL、人、建物の間にも強い結びつきがある。



GLとは環境である。

その土地ごとの個性を持ち、全てを支える基盤である。環境なくして植物は育たず、またGLがなくては建物は存在できない。



人とは植物である。

植物のように、人は周囲の状況に影響を受けながら成長する。また、植物が土を育てるように、人は建物を育てていく。



建物とは土である。

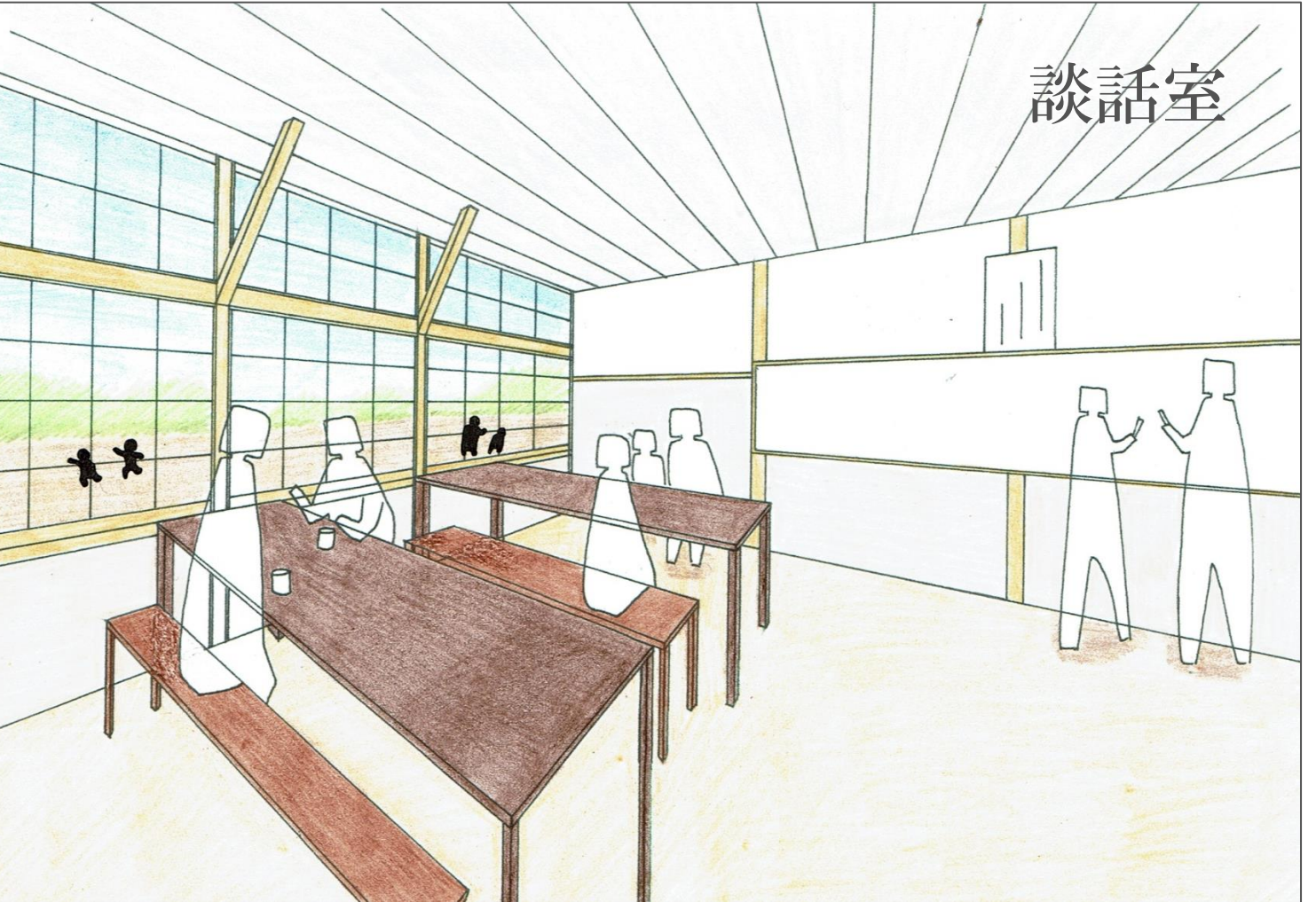
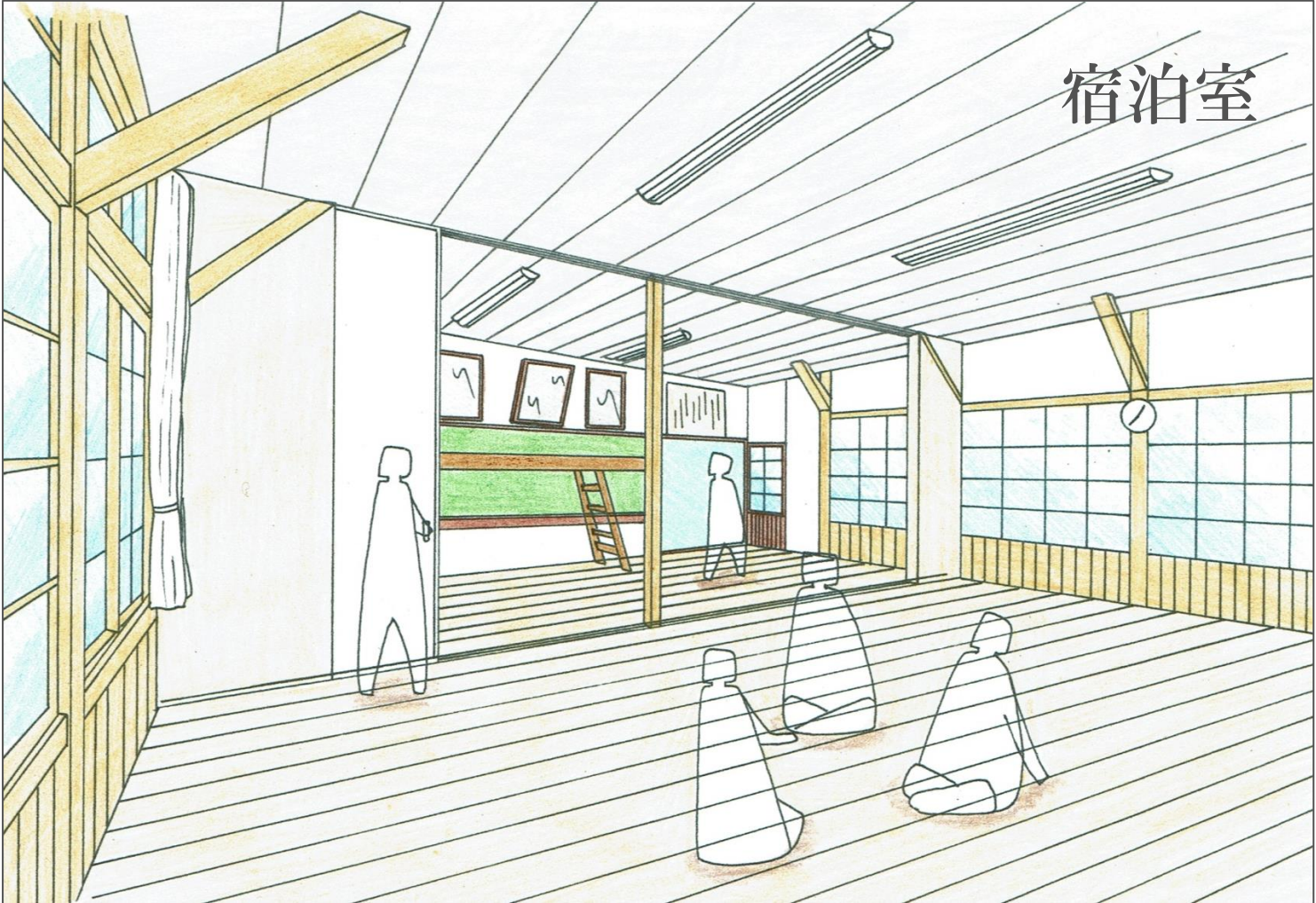
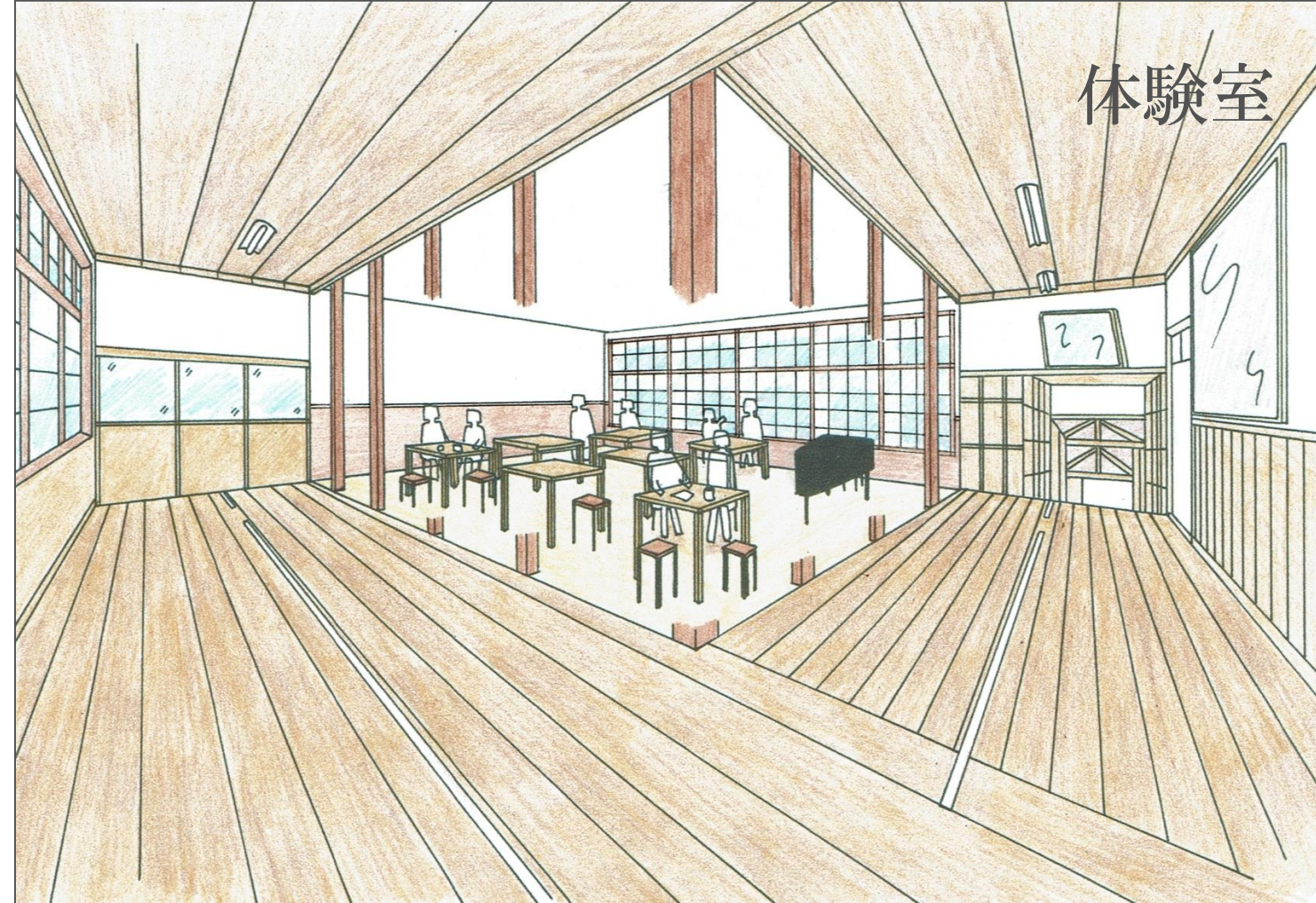
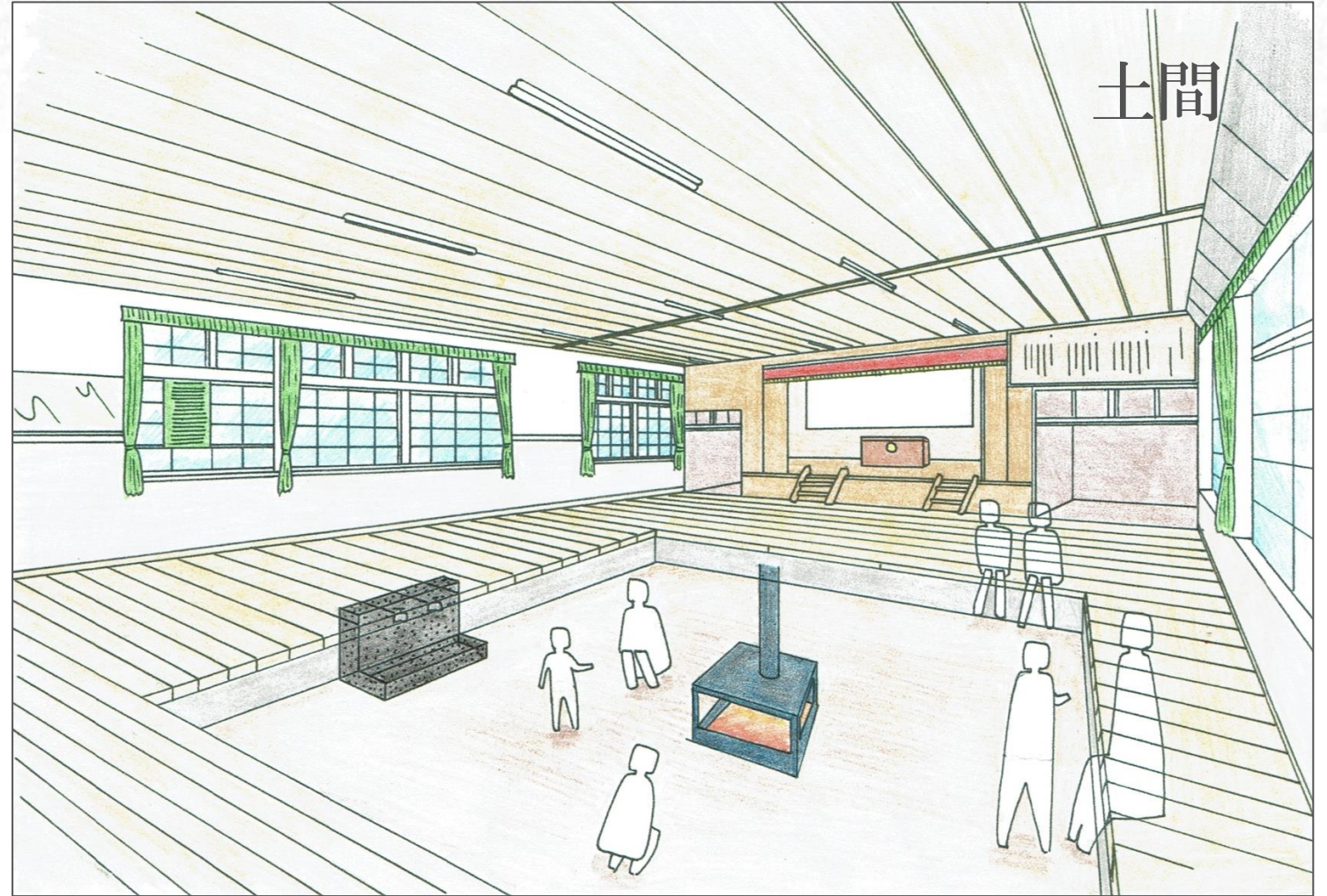
植物の成長の手助けをする役割を持つと同時に、土もまた植物によって成長する。建物もまた、人がいるからこそ、その姿を保ち続けることができるのである。



非日常体験の提供と文化財保護

農作や特色品製作など、都市生活では経験できない体験ができる取り組みの本拠施設として、使われなくなった小学校をリノベーションして貸出。これによって、小学校という文化財の保護や、地域の活性化を促すことにつながる。

豊かな自然、地元の人たちの温かさに囲まれて過ごす時間の中で、GLをはじめとする私たちを取り囲む要素や自身の原点とは何か、に想いを巡らすことにつながると考えた。

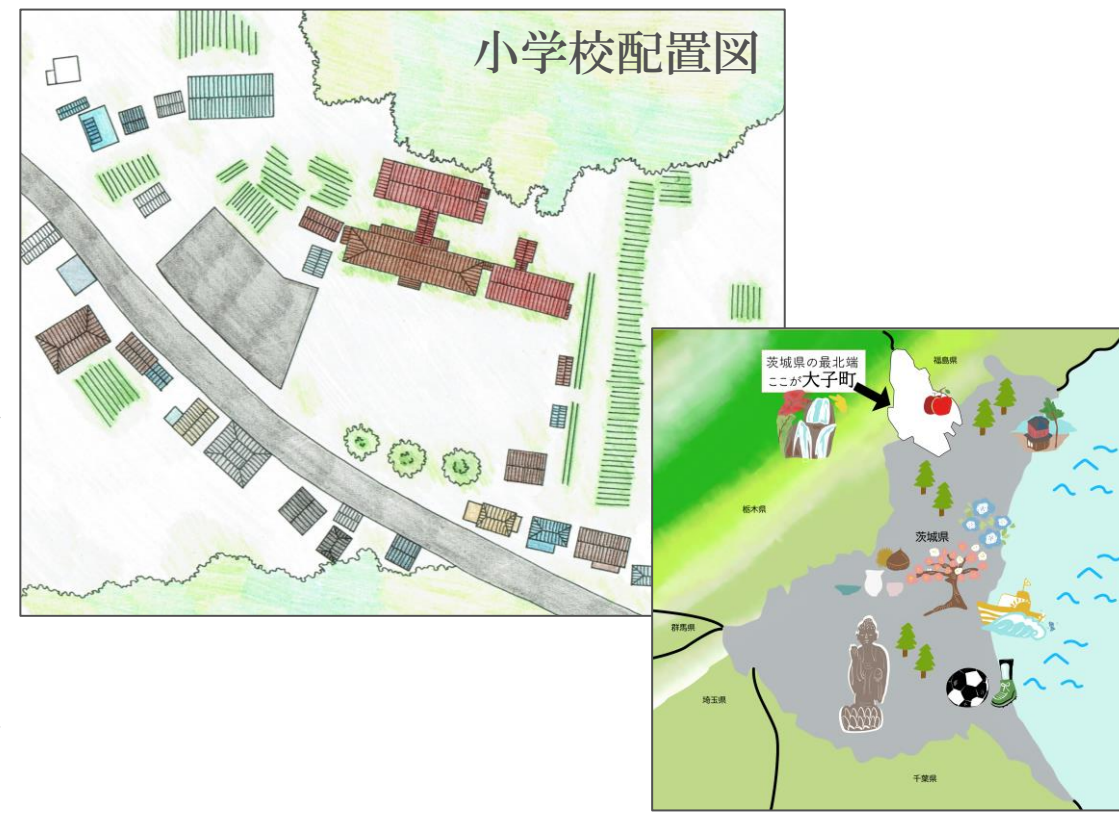


計画地選定

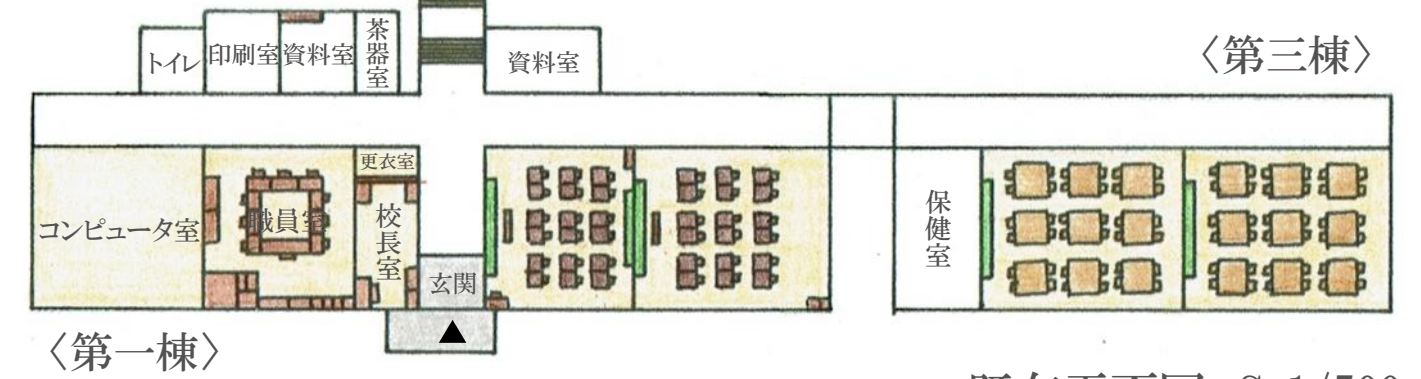
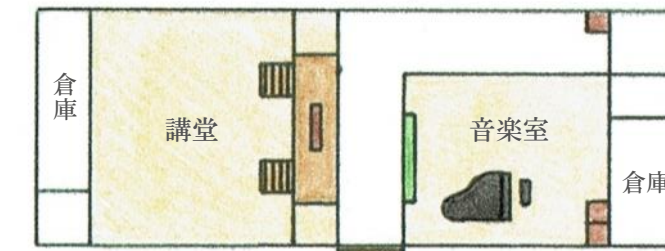
計画地として選んだのは茨城県大子町。豊かな自然に囲まれ美味しい特産品にあふれる町であり、近年は移住支援や子育て支援に力を入れ、町全体で地域活性化を目指している。稲作や畜産をはじめ、リンゴやそば、こんにやくといった多くの特産品を有する観光地として発展してきた。農業体験などの取り組みも頻繁に行われている。

県内に現存する最古の校舎である旧上岡小学校は、国登録有形文化財に登録され、地元住民を中心に組織された「上岡小跡地保存の会」によって維持管理がなされている。明治期の木造校舎や懐かしい小学校の風景がそのまま残されており、訪れた誰もが小学生の頃の思い出と重ね、子供に帰ったようなひと時を過ごせる場所である。

今回の計画を通して、県外からの人の出入りが増えることにより、地域のさらなる活性化を期待する。



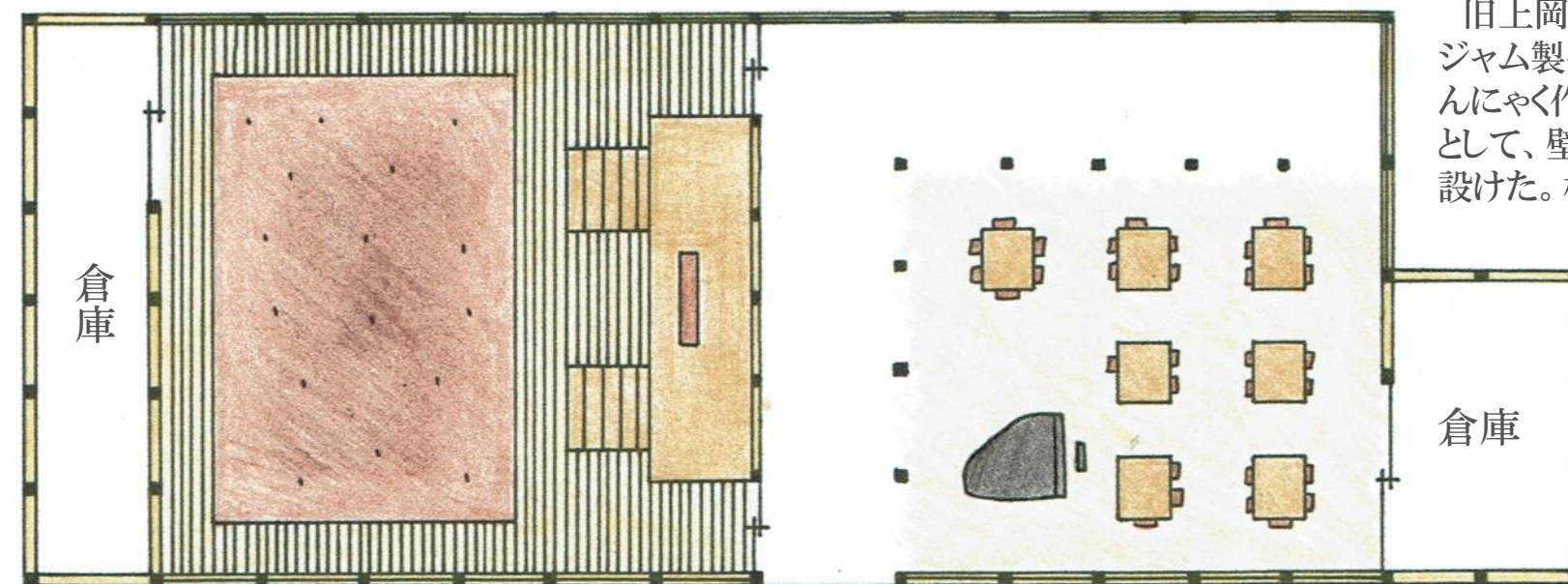
〈第二棟〉



既存平面図 S=1/500

体験室

旧上岡小で行われているリンゴジャム製作やシルク印刷体験、こんにやく作りなどのワークショップ室として、壁をなくした開放的空間を設けた。机は既存のものを再利用。

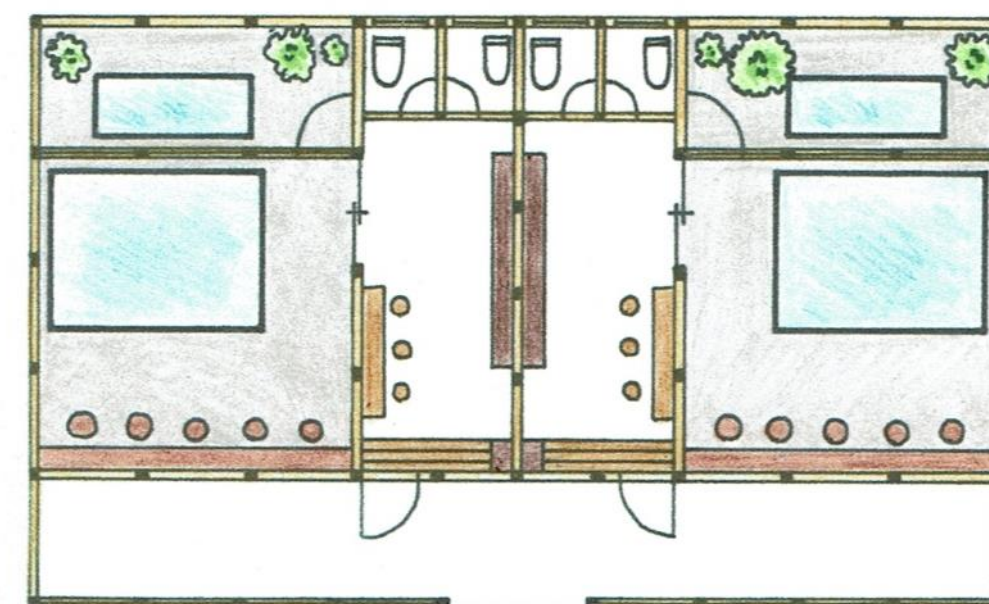


土間

講堂の床板を剥がし土間として活用。農作体験にて収穫した野菜の洗い場。中央には暖炉を設置し、天候や時間を気にせず土の温かみを感じることのできる空間である。

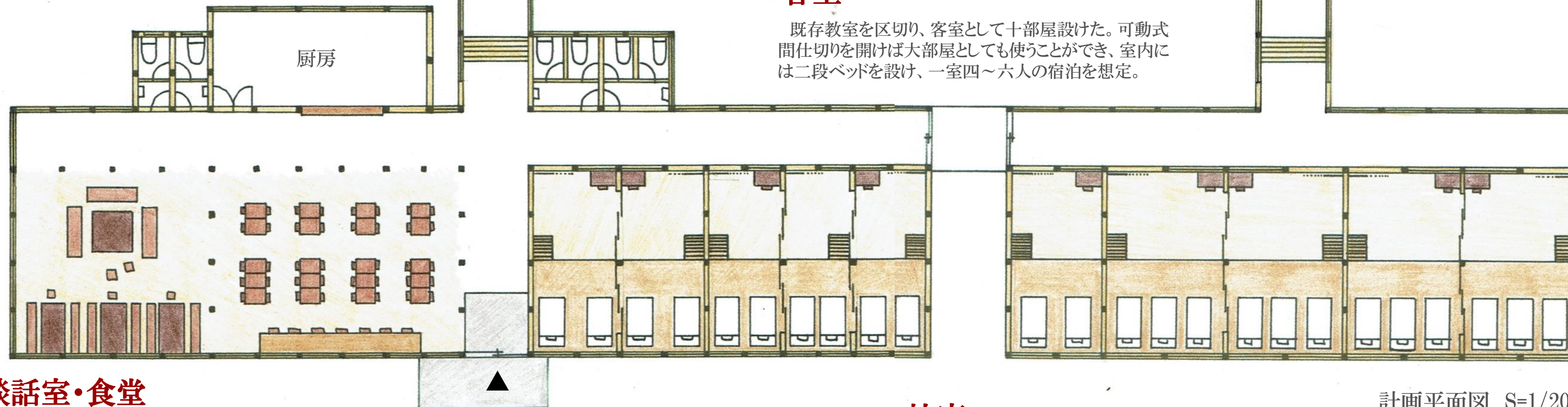
浴場

第四棟として増築した建物内には広々とした大浴場を設置。半屋外の露天風呂からは小学校裏山の四季を感じる風景が望める。



客室

既存教室を区切り、客室として十部屋設けた。可動式間仕切りを開けば大部屋としても使うことができ、室内には二段ベッドを設け、一室四～六人の宿泊を想定。



談話室・食堂

既存建物三部屋分の仕切りを取り払い、体験室と同じく柱だけの大きな開放空間。宿泊者だけでなく地元民も集い賑やかなコミュニティスペースとして利用される。談話室の窓は校庭に面しており、親は子供の様子を見ながらゆったりと過ごすことができる。食堂では宿泊者が収穫した地元の野菜で作られた料理がふるまわれる。

校庭

校庭は常時解放されており、木材DIYをはじめとするワークショップや屋外食事など、世代を問わずのびのびと過ごせる空間として利用される。

計画平面図 S=1/200

